# 2001年度　国際・「異文化理解」科目について

保健体育科教諭　海士部　伸　子
英語科教諭　木　村　政　子

## 1.　はじめに（昨年度までの授業について）

昨年度までは１年生に２単位、２年生に１単位の自由選択授業の中に「国際」（教科名）の「異文化理解」「比較文化」「イタリア語」（科目名）などが置かれており、そのうちの１年生２単位の選択授業の「異文化理解」を木村が担当していた。

他の科目はそれぞれ、本校の国際理解教育推進委員会（旧国際学級検討委員会）のメンバーが担当していたが、海士部は昨年度までは担当していない。（昨年度の木村の「異文化理解」の授業については、本校2000年度研究紀要第46号「授業報告」をご参照。）

## 2.　今年度の授業

今年度は、2002年度からの週休２日制に伴うカリキュラムの変更により１年生の選択授業がなくなり、２年生のみ１単位分の選択授業が置かれることとなった。

この２年生向けの「異文化理解」の授業は、昨年度の木村が担当していた授業の延長線上にあるが、今年度については2003年度からの新学習指導要領の「総合」を視野に入れた授業作りをするため、今までの授業内容にはこだわらず、国際理解、異文化理解のみならず、開発教育の側面も加えながら新たな授業作りを行なっていこうということで、昨年度末から国際理解教育推進委員会のメンバーで話し合いを行なってきた。（別紙１ご参照。）

この授業を選択している生徒についてとこれまでの授業の概要は以下の通りである。（今年度の授業は土曜日の３・４時間目に置かれている。）

＜生徒の概要＞

日本人生徒　17名

外国人生徒　１名（出身国：中国。本校の外国人生徒入試枠で入学。本校入学前には日本に３年間滞在し、公立中学に通学、優秀な成績で卒業している。日本語を始めたのは中学１年生からだが、日常会話はもちろん、授業を聞くことにおいてもほとんど不自由していない。）

留学生　3名（出身国：スイス、チリ、オーストラリア）

≪計　21名≫

＊注1：内、昨年度1年生対象の「異文化理解」の授業を受けていた生徒：日本人生徒11名、外国人1名。）

＊注2：留学生は全員2001年4月から1年弱の予定で本校に在籍。来日直後の4月時点で、オーストラリア出身の生徒は2年ほど母国で日本語を学習していたが、漢字が少しわかるのと、ごく簡単な日常会話が聞き取れるくらいで発話は満足にできない。他の二人は日本語学習暦はなく、簡単な会話でも理解できないことが多い。

**2—1　1学期の授業内容**

昨年度の「異文化理解」の授業の受講者の多くが今年度もリピーターとして受講しているので、昨年度の生徒の様子を参考に、授業を組み立てていくこととした。

昨年度は、本校紀要にも書いたように、レポート作成および発表のあとに、クラス全体での討論を目標としていたのだが、あまり全体で深く考えることのできるレポートが少なかったためにそこまで授業を掘り下げることができなかった。

加えて、どちらかと言えば先進国を扱ったものが多かったこと、また、アジア系諸国を扱ったものでも比較的経済状態の良い国や文化を扱ったものが多かったことから、生徒自体の興味関心があまり開発途上国・発展途上国には向いていないのでは、という不安があった。

しかし、授業時間以外での生徒たちとの会話の中で、学校外でさまざまな活動（例：「国境なき医師団」「ユニセフ」など）に関わっていることを知り、かつ発展途上国への関心も高いこと、また、長期休暇の際には欧米ではなくアジア諸国へ短期留学する生徒たちもいることなどから、当初の不安も解消された。

第1回目　（4月21日）

テーマ：「留学生三人に対するインタヴューを中心に、3つの国（スイス、チリ、オーストラリア）の国の文化を知る」

第1回目の授業では、留学生3名が、まだほとんどあるいは全く日本語を理解できないので、他の生徒たちが1つ6～7人で3つのグループを作り、それぞれが同じテーマ（School, Daily life, Impression on Japan）で、三人の留学生に英語で一定時間ずつインタヴューし、それを日本語と英語でまとめるということを行なった。

当初は2時間の授業の中で、インタヴューの後、簡単な発表までを含めた形の授業構成を考えていたが、実際にはインタヴューが盛り上がって時間オーバーになり、クラスでの発表はごく限られたものとなってしまった。結局、インタヴューの内容を授業後に各班でまとめさせ、後に印刷して全員に配布す

る形でフィードバックした。インタヴューの際に生徒に参考資料として渡したhandoutは、別紙2ご参照。

第2回目　(5月19日)

テーマ：「留学生三人の国（スイス、チリ、オーストラリア)、外国人生徒の母国（中国)、そして日本の、計5カ国の子供たちの“あそび”を調べ、実際に体験してみる」

今回は、各留学生と外国人生徒をそれぞれ核にしてグループを作り、それに日本人生徒だけのグループを加えた5グループで各国のあそびについて調べ、レジュメ作成（日本語と英語による）および体験できるあそびの精選を行なった。この調査およびレジュメ作成等は、授業時間外に行なわれた。

授業中は、各グループで精選した各国のあそびを、班員の説明のもと、全員で体験した。教室が狭いので、広い場所が必要な場合は屋上を利用した。

5カ国のあそびを体験した後、教室で、さらに体験しなかった他のあそびについても各班からそれぞれ説明をしてもらうつもりだったが、あそびの体験に時間がかかり、これは不十分な結果となった。授業後、生徒には感想を書かせた。

＜体験したあそび＞

・Chasing Game（オーストラリア）→ハンカチ落としに近いもの。

・A moler cafe（チリ）→形はフォークダンスのようだが、似て非なるもの。

・Who has the coin？（スイス）→円陣を組み、コインを手の中で回していく。

・Ti jian zi（中国）→日本の蹴鞠のようなもの。

・牛タンゲーム（日本）→合言葉“牛”を連発しながら手をたたく回数を変えていく。

第3回目　(6月16日)

テーマ：「留学生三人の国（スイス、チリ、オーストラリア)、外国人生徒の母国（中国)、そして日本の、計5カ国の料理を作り、食べてみる」

今回は、前回のあそびを体験する授業で作った5つの班を、そのまま各国の料理担当班とし、授業時間外に日本語と英語でレシピを作った。

特に、留学生三人と外国人生徒は、それぞれ原案となる料理のレシピを事前に作り、その後、各班でメニューを決めた。各班には、事前にレシピのコピーを配り、食材の調達も生徒たちが行なった。

当日は朝から食物室で仕込みに入る班もあり、授業時間の2時間だけでは足りないようだったが、昼休みも使って何とか全ての料理を完成・試食し、片付けるところまでできた。

各料理の説明などは、全員にレシピを配布した他、試食の最中に各班から一言ずつ説明してもらうなどした。

＜各国の料理＞

・Zuri Gschnatzlets（スイス）→クリームソースのパスタ

・Original Birchermuesli（スイス）→オートミールとリンゴのデザート

・エビと卵のチャーハン（中国）

・卵とトマトのスープ（中国）

・杏仁豆腐（中国）

・Summer Salad（オーストラリア）→４種の豆のパスタサラダ

・Chocolate Slice（オーストラリア）→チョコレートクッキー

・Cazuela de Vaca（チリ）→牛肉のカスエラ（シチューのようなもの）

・Humitas（チリ）→ウミータ（蒸とうもろこしの葉包み）

・玉ねぎの鳥味噌（日本）

・飛竜頭の揚げだし（日本）

・かるかん（日本）

第４回目　（７月７日）＊夏季短縮授業40分×２時間

テーマ：「青年海外協力隊OGの方に赴任国ザンビアについてのお話を聞く」

夏休み中の課題レポート作成に向けての動機づけおよび参考として、この“お話を聞く会”を企画した。これは、JICA（国際協力事業団）が“サーモン・キャンペーン”（小・中・高・大学などへ講師を派遣するもので、必要経費はJICAが負担。）を実施していたのを受けて、講師派遣を依頼したことにより実現した。ふだんあまり知らないアフリカのイメージをつかむために、現地で撮影したビデオを利用したり、実際に講演者の方が体験された異文化について、価値観の違いや社会的背景の違いなどをも含めてお話いただいた。

夏時間のため授業時間が短く、十分な質問時間をとれなかったが、生徒たちは積極的に質問していた。授業後、生徒には感想を書かせた。

＜夏休み中の課題レポート＞

頭ではなく、まず体で異文化を体験することを主眼として、別紙３のようなレポート作成を夏休み中の課題として出した。

さらに、この夏休み課題レポート計画書（７月13日提出）をチェックした後、別紙４のようなプリントを生徒に配布し、各自のレポート計画を練り直すきっかけとした。

＜文化祭への参加　～異文化共和国ODECO～＞

２学期の授業について述べる前に、９月下旬に行なわれた本校の文化祭への参加企画について述べることとする。

６月頃から「異文化理解」の受講生の中から文化祭への有志参加を呼びかける声が上がり、受講生全

体に参加の意志を問うたところ、全員が参加することとなり、かつ受講生以外の２年生も数名が参加することになった。

企画内容を考えるために、１学期期末テスト最終日の６月30日(土)の午後には、有志参加者10数名が広尾の国際協力プラザへ資料探しに出かけ、ビデオの視聴や資料の収集に数時間を費やした。

２年生は一人で３つ４つの有志をかけ持ち、かつ委員会や部活動の中心的役割を果たしているため、なかなか全員そろっての会合はできなかったが、幾度も討議を重ね、内容を精選し、役割分担を決めて有志企画を作り上げていった。

企画内容は、「国境なき医師団」のパネル展示を始めとする国際協力団体の活動紹介、発展途上国の現状（地雷、難民、医療、教育、食料、等)、留学生たちの母国紹介、ビデオ視聴、チャリティーバザー、等々。チャリティーバザーの売上は32,000円ほどになり、全額セーブ・ザ・チルドレンへ寄付した。

### ２―２　２学期の授業内容

２学期の授業は、９月が行事や祝日で土曜日がつぶれたため、10月からとなった。７月の１学期最後の授業から約３ヶ月のブランクがあったわけだが、９月末までは文化祭への有志参加で忙しくしていたため、授業がなかった痛手はそれほど感じられなかった。

また、夏休み中に縁あって、関西大学が中心となって立ち上げた、“Meet the Globeプロジェクト”に本校も参加させていただけることになり、９月中は、青年海外協力隊の現役の隊員の方々と生徒たちとのメール交換の準備を進めた。

注）“Meet the Globeプロジェクト”の主な活動目標：

① 学校での授業実践を含む隊員との交流学習の促進

② 隊員が経験する異文化体験事例の体系化

第５回目　(10月６日)

テーマ：「“Meet the Globeプロジェクト”の紹介と、メール交換に向けての準備（班分け、メール第１号作成)」

この日は、担当教官がまとめた夏休み中の生徒の体験レポートの概略（別紙５ご参照）を始め、“Meet the Globeプロジェクト”が発行している“Meet the Globe通信”の抜き刷り（世界各地で隊員が体験した「変っ！」がたくさん載っている。）及びその中に出てきた各国の位置を記した世界地図、そして今回、生徒たちとメール交換することになった３名の隊員の方々の自己紹介メール及び赴任している国々の概略を記したもの、等々の印刷物を配布し、主に青年海外協力隊員とのメール交換についての説明および準備を、以下の順序で進めた。

① “Meet the Globeプロジェクト”の説明。

② メール交換をしてくださる隊員の方々の紹介。

③ 赴任国の情報。（フィリピン、ベトナム、ブルキナファソ）

④ メール交換の方法・班分けの仕方などについて論議。

→ １班対１隊員の形でメール交換していくことを確認。

メーリングリストを作成し、どの班も他の班の活動内容がわかるようにすることに決定。

MLのための班別アドレス・パスワードの確認。

班別自己紹介メール（質問つき）作成・送付。（コンピュータ室使用。）

⑤ 次回の授業時に、体験レポート発表を行なう旨、連絡。レポート返却。

第６回目　(10月20日)

テーマ：「夏休み体験レポートの発表を聞き、なぜ違和感を覚えたのか考える、プラス実際にやってみよう！（＋ブータン王国の生徒たちとの文通、隊員とのメール交換その後)」

前回配った資料（別紙５）を元に、夏休みに各自が体験し、考えた内容を順番に発表した。(今回10名）聞いている生徒たちも質問や疑問点などを出していき、他人の体験を自らの体験のようにとらえ、感覚を共有していくべく努めた。

この後、ブータンの生徒たちとの文通の件と、隊員とのメール交換のやりとりの仕方を説明してから、調理室へ移動し、レポート発表の体験談で多かった、実際にカレーを手で食べてみるということに全員でチャレンジした。

授業の流れは以下の通りである。

① 夏休みの体験レポートを元に、各自が３～５分位ずつ体験談および気づいた点について語る。

→ 実際に体験したときなぜ違和感を覚えたのか。異文化を理解するために必要なことは何か。

② ブータン王国の生徒たちとの文通について。

→ ブータンの10代～20代の学生たち20名から自己紹介文（英文。10の質問つき。）が写真と共に送られてきたのを受けて、こちらも同じ要領で返事を英文で書く。10月26日㈮締切。個人写真撮影も授業後に行なった。(指定した10の質問を含む自己紹介プリントは、別紙６ご参照。)

③ 青年海外協力隊員とのメール交換について。

→ メール交換をしていくにあたっての、班内での役割分担確認。(回覧用プリントを使用し、返信メール作成者が全員の質問をメールにまとめて送付する。(別紙７ご参照。）及び「返信メール作成＋メールチェック」分担決定。)

メール内容について、各自が自分の夏休み体験レポートを発展させる形でそれぞれに質問を考えていくことを確認。(特に班別のテーマは作らない。)

④　実際にみんなでやってみよう！（調理室にて）

→　担当教官の方で用意しておいたタイ米とタイカレーを、実際に手だけで食べてみた。食器によっても冷め具合が違ってくるため、アルミと陶器の食器の２種類を使い、食べ比べた。

初めは食べにくそうにしていたが、教官側の食べ方の指導もあって、最後には皆、上手に食べることができた。

第７回目　(11月10日)　＝公開教育研究会・公開授業＝

テーマ：「①ブータンの高校生に答えてもらった10の質問を通して、彼らの生活や考え方を知る、②ビデオ視聴を通してブータンでの生活やその考え方をより理解し、日本での生活や日本人の考え方と比較する」

今回は、本校の公開教育研究会の公開授業という特別枠のため、同じ土曜日ではあったが途中休憩が20分で２時間続きという変則授業であった。また、生徒たちは協力隊員のメール交換で分かれた３つの班別に、それぞれ４つの机を囲む形で座った。

授業は、前回の授業時に説明した①「ブータンの高校生たちの自己紹介文」と、宿題として課したブータンの高校生たちの自己紹介文に対する②「自分たちの自己紹介文（英文)」、および参考として③「ブータンの高校生一覧」を配布し、まず①②の資料を読み比べて疑問に思ったことや不思議に感じたことなどを各自が付箋に書いて班の机に貼るところから始めた。

その後、各自の付箋に書いた意見・感想を班の中で披露し合い、その中から班でディスカッションしたい内容について１つ選ばせた。このとき、前の黒板にそれぞれの班がどのようなテーマを選んだかを書かせた。各班のテーマは、①どうして自己紹介のプリントに全員が青万年筆で書いているのか（→なぜ黒ではないのか)、②なぜ彼らはこんなに両親を大事にするのか、③なぜ彼らは将来就く仕事に非常に重きを置くのか、の３つに絞られた。

各班のディスカッション後、班の代表がその内容について全体に発表した。予定ではこの後、その内容について全体で意見交換をするはずであったが、時間切れでそこまでいけなかった。

２時間目に入って、４番目の資料として教官側がまとめた「ブータンの高校生とクラスの生徒たちの自己紹介内容比較一覧」を配布し、全体として二国の高校生の間にどのような違いが見られるかをざっと確認した。その後、NHK第一テレビで放映された「あなたはいま幸せですか・地球家族2001」のビデオのブータンに関係する部分のみを30分ほど視聴し、ブータンについてのさらなる理解を深めた。

第８回目　(11月17日)

テーマ：「青年海外協力隊員とのメール交換現状報告および班別ミーティング、プラス続・夏休み体験レポートの発表を聞き、なぜ違和感を覚えたのか考える」

公開授業の前の回で、青年海外協力隊員とのメール交換のやり方について用紙を配って説明したが、

その後の各班でのメールチェック状況やトラブル等を報告させ、必要に応じてコンピュータ室での作業をさせた。

２時間目は、以前配った資料（別紙５）を元に、夏休みに各自が体験し、考えた内容を順番に発表する続きを行った。(今回５名)

第９回目　(12月１日)

テーマ：「続々・夏休み体験レポートの発表を聞き、なぜ違和感を覚えたのか考える、プラス留学生たちが日本での生活における最大の違和感を語る」

前回同様、資料（別紙５）を元に夏休みの体験発表の続き（３回目）を行った。(今回６名) 今回の発表者の中にはこの日が最後の参加となる留学生３名もいたため、体験発表と共に、この一年を振り返って、日本での「何これ?!変！」について自由に話してもらった。その際、他の生徒たちからも多くの質問が出て、大いに盛り上がった。

留学生たちからは、「合宿などでの大勢で入るお風呂」に非常に違和感があったということや、母国では挨拶としては日常的な「hug（抱く)」が日本では全くなかったことが精神的に不安だったという発言があり、国別の文化的な背景の違いを改めて知るよい機会となった。

**２―３　３学期の授業内容**

３学期は１月に授業がないため、年末年始にかけて、メール交換している協力隊員の方々に、各班からそれぞれ季節のご挨拶メールを送ることと、３つの班のうち２つまでが11月から連絡が取れなくなっていたため、再度こちらから質問メールを送りなおすなどの作業を授業外でまず行った。

実際の授業は２月に２回、3月に１回しかないため、１～２学期に時間がなくてあまりできなかったメール交換にからむ班別での作業を、授業時間を使って行うこととした。

第10回目　（２月２日）

テーマ：「協力隊員とのメール交換について、各班で確認作業を行う、およびフィリピン・ベトナム・ブルキナファソそれぞれの担当国について、各自のレポートテーマを決定する」

これまでほとんどが授業時間外で行ってきたメール交換の班別確認作業を、授業時間内で行った。今回は１月までに確認したメールの返信内容を確認したり、まだ返信のないところは再度メールを送るなどの作業を行った。

また、３月上旬締め切りの２つ目のレポート（協力隊員とのメール交換から学んだこと）についての各自の研究テーマを決定し、まとめに入る作業も行った。

第11回目　（２月16日）

テーマ：「①協力隊員とのメール交換について、各班で再び確認作業を行う、②各自のレポートテーマに沿って調べ学習を行う、③次回の授業時での各班の発表について班ごとに確認しておく」

前回行ったメール交換の確認作業を再び行った。今回でほぼ最終となるので、各班で最後の質問事項をまとめたり、最後のご挨拶メールを送る担当者を決めるなどした。また、必要に応じて班ごとではなく、個人で隊員の方にメールを送ってレポート作成に役立ててもよいことも確認した。

さらに、３月締め切りのレポート（別紙８に詳細）のテーマに沿って、コンピュータ室や図書室を利用して各自で調べ作業の続きを行った。また、次回の最終授業の時の発表の打ち合わせなどを班別で行った。

第12回目　（３月２日）

テーマ：「青年海外協力隊員の方々とのメール交換を通してわかった各国の事情、および各自のレポート作成途中経過報告」

今回が今年度最後の授業となるため、年度の後半に行ってきた協力隊員とのメール交換を通してわかった各国の事情について、各班の代表者が発表した。それに引き続き、各個人が作成中のレポートについて、なぜそのテーマを選んだか、また現在どのような調査状況かを発表した。発表していく中で、他の生徒たちは適宜質問をしたり、調査方法について示唆するなどした。

＜生徒たちの課題レポートタイトル一覧＞

＝夏休み課題レポート拡大バージョン＝

・スペイン　５回の食事

・海外にあるいろいろな異文化

・Let's Go To MANGA's World

・日本の箸マナー

・インドの人々の宗教観を知る＋ベトナムの宗教

・コミュニケーションについて＋障害児の歴史

・インド人とカレー

・カルチャーショック

・イタリアと日本

・ばらぽろ日本語　～地域に根づく方言。東京まで聞こえる方言～

・インドカレーを手で食べる

・イスラム教

・肉立ちをして…

・カレーを右手で食べてみる＋ティッシュを使わずに用を足す

・韓国での食事マナー

・中国トイレの事情＋世界トイレ事情

＝隊員の赴任国についてのレポート（含、メール交換から学んだこと）＝

・ブルキナファソの民族音楽

・フィリピン　～アブ・サヤフ～

・ベトナムの食

・アオザイの国　ベトナム

・ベトナムコーヒー

・ブルキナ　～世界で３番目に貧しい国の検証～

・フィリピン　～民族衣装～

・ブルキナファソ　～中部アフリカのさまざまな部族～

・ブルキナファソの食事情

・ブルキナ　～アフリカへの第一歩：家族のあり方～

・PHILIPPINES　～行事：祭り～

・ベトナムの日常生活

・フィリピン　～スモーキーマウンテン～

・ブルキナファソ　～医療と衛生～

・フィリピンの面白いマナー?!習慣について

・ベトナムの祝祭日

## 3.　授業を終えて

今年度の「異文化理解」の授業は、始めにも書いたように昨年度までのものとは違い、新カリキュラムの「総合」を意識してのものであったため、その内容についてはかなり議論をし、吟味してきた。また担当教官も２人ということでいろいろな面で補い合うことができ、かなり攻めの授業ができたと思う。

しかしその反面、隔週土曜日２時間続きの授業が、実際には行事その他でつぶれてしまい、ほぼ月１回ペースでしかできなかったことから、授業内容につながりを持たせるのが難しかったこと、授業時間そのものが少なかったため、授業外での作業を強いることが多くなり、生徒たちに過度の負担がかかってしまったこと、また、授業内容を決めていくに際して、担当者側の“あれもやらせたい、これもやらせたい”という気持ちと授業時間の少なさから、どうしてもトップダウン形式になってしまい、生徒たちの意見をあまり反映させることができなかったこと、などが大きな反省点であると言える。

この１年を通して、担当者側もさまざまな人との出会いや日々の調査研究の結果から、年度当初の授業計画では考えていなかった内容を次々と盛り込むこととなり、生徒側から見ればそれがかなり唐突な

ものに見えたのであろう。今後は、より良いものを追い求める心を保ちつつ、常に生徒側のレディネスを意識しながら授業計画を立てていく必要があることを肝に銘じて、さらなる授業実践を行っていきたい。最後に、資料として生徒たちの感想文（別紙９）を載せておく。（レポート集は別刷した。）

＜別紙１＞

## 国際理解教育推進委員会　＝小グループミーティング記録＝

2001年２月７日(水)

参加者：木村、室岡、海士部

（文責：海士部）

◎　2001年度国際理解科目（２年生）について

○　クラス…基本は１クラス（一般生徒＋外国人生徒＋留学生）

（ただし、授業の内容や選択者数に応じてクラス分割もあり得る）

○　仮タイトル：「違うっておもしろい！」

日常生活の中で、＜違うこと＞を＜変っ！＞と捉え、決めつけ、排除していることがありませんか？自分という人間はこの世の中に一人しかいません。自分以外の人間の考えや行動は、みんな＜違う＞のです。

国際理解の原点は、＜違い＞を＜受け入れ＞、＜違い＞に＜興味を持ち＞、同じ気持で＜やってみよう！＞と行動を起こすことではないでしょうか？　そして実際にやってみたことから感じ、考えたことを自分の言葉でまとめてみる。そうすることで頭と身体が理解を深め、また次なる＜違い＞への興味がわいてきます。

この授業では、言語、生活習慣など＜違う＞ものを持ち寄った人間が集まり、＜何かする＞ことを通して、自分との＜違い＞を知り、＜違う＞人間と過ごす時間が、自然で楽しいと感じられるような環境づくりを目指します。さらに、＜共存共栄＞の生き方を模索していきたい。

○　年間指導計画（例）

| | 単　　元 | 主な授業内容 | 主眼点・学習方法・留意点等 |
|---|---|---|---|
| 1学期 | ・仲間と仲間の国を知る | ・自己紹介ゲーム<br>・外国人生徒や留学生の国の事情を知る<br>・お国自慢のお料理紹介<br>・お国自慢の遊び | 全員が必ず話す状況が作れるゲーム |
| 14 | ・研究計画作成 | | 何をどのように調べていくのか |
| 夏休み課題 | | 国内外で見聞きした、生活の中にある「変っ！」の情報収集 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 2<br>学<br>期<br><br>14 | ・仲間以外の国や地域の生活を知る | ・夏休み課題報告<br>・夏休みの「変っ！」に実際に触れよう<br>・「こんな時どうする？」<br>—洗剤・たわしをつかわない食器洗い?!<br>—トイレづくり?!<br>—バケツ１杯のお風呂で身体を洗う?!<br>・クスクスゲーム?!<br>・ディベート | 「やってみたいこと！」をピックアップ<br>「やってみたいこと！」を実際にやる<br>何で洗うときれいになるか考え試す<br>グランドを掘って、トイレを作る<br>家でやってみて、授業で報告<br>自分の意見を相手に伝える |
| 3<br>学<br>期<br><br>10 | ・人間を見つめる<br>・研究のまとめ | ・私から消えた「変っ！」「いや」「嫌い」 | 国際理解に必要なことは何か？<br>研究レポートの記載内容について<br>ア　表紙（テーマ、氏名、担当教官）<br>イ　研究の目的<br>ウ　研究の方法<br>エ　研究の内容、データ<br>オ　研究の反省、今後の課題 |
| 学年末課題 | | 年間研究のまとめを小冊子にする | |

＜別紙２＞

2001年度　２年「異文化理解」　“留学生へのインタヴュー”　2001. 4 .21

International Understanding Class　“Interview for exchange students”

| | School | Daily Life | Impression on Japan |
|---|---|---|---|
| C | school term<br>time table<br>subjects<br>club activities<br>school uniform<br>school form<br>—girls' high or co-ed ?<br>—public or private ? | what time-do what<br>daily meals<br>housework<br>(help your mother ?)<br>free time<br>—hobbies,<br>—sports,<br>—a part time job,<br>—after school,<br>—weekend | knowledge of Japan<br>(before coming)<br>Tokyo<br>Japanese food<br>Japanese language<br>Japanese people<br>Japanese school<br>(about this school) |

| | | | |
|---|---|---|---|
| R | school term<br>time table<br>subjects<br>club activities<br>school uniform<br>school form<br>—girls' high or co-ed ?<br>—public or private ? | what time-do what<br>daily meals<br>housework<br>(help your mother ?)<br>free time<br>—hobbies,<br>—sports,<br>—a part time job,<br>—after school,<br>—weekend | knowledge of Japan<br>(before coming)<br>Tokyo<br>Japanese food<br>Japanese language<br>Japanese people<br>Japanese school<br>(about this school) |
| A | school term<br>time table<br>subjects<br>club activities<br>school uniform<br>school form<br>—girls' high or co-ed ?<br>—public or private ? | what time-do what<br>daily meals<br>housework<br>(help your mother ?)<br>free time<br>—hobbies,<br>—sports,<br>—a part time job,<br>—after school,<br>—weekend | knowledge of Japan<br>(before coming)<br>Tokyo<br>Japanese food<br>Japanese language<br>Japanese people<br>Japanese school<br>(about this school) |

＜別紙３＞

## 夏休み課題レポート

・テ ー マ：「えっ、変！何コレ違う？？？」と思ったことを実際に体験して

・提出〆切：９月７日㈮

Ｂ５レポート用紙に図表・写真・絵などを入れて10枚程度　海士部まで

・まとめる内容

１．日本や海外にあるさまざまな「えっ、変！何コレ違う？？？」の情報を収集、まとめる

２．収集した情報の中から興味のあるものを選び、身体を使って実際に体験してみる

・どうしても自分にはできなかったこと、理解できない・納得できなかったこと

・なるほど！そうか！と納得したこと、感心したこと

３．なぜ、最初に＜違和感を覚えたのか？＞考えてみる

・「変！」と感じた出来事の背景にあるものを探る（歴史・環境・民族・宗教・社会情勢など）

・「変！」と感じる自分を見つめる。（性格、生育環境など）

・他人を観察する。（自分以外の人が同じ体験をしたらどう感じるのだろう？）

４．異文化を理解するために必要なこと（能力）は何か、自分の言葉でまとめる

・異文化を理解する上で、今の自分に欠けている力は何か

・これから力を入れて学習していきたいことは何か

---

## 夏休み課題レポート計画書

＿＿＿組＿＿＿番　　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

○　情報収集先（予定国・場所）

○　ぜひチャレンジしたいと思う「えっ、変。何コレ違う？？？」

○　体験した時に予想される自分の反応

＜別紙４＞

2001．7．19(木)

## ２年生異文化理解　夏休み課題について

夏休み課題レポート計画書を返却します。

課題がピンと来なかった人もいるようなので、いくつか例をあげてみたいと思います。

・日本：ボランティアセンターで手話、点字のサークルに参加してみる、
　　障害者との交流（K計画）

・インド：カレーを右手だけで食べてみる（T，K計画）

・中国：ニーハオトイレ（ドア無しのトイレ）で用をたす（W計画）

・韓国：肘をついて立膝でご飯を食べる（Y計画）

・断食に挑戦

・１日数回時間を決めてお祈りをする

・バケツ１杯で身体を洗う

・ティッシュを使わず用をたす

などなどを１回、１日だけではなく、数回、数日継続的にやってみると良いと思います。継続することで（継続できなかったことで）、同じ物事に対する見方、感じ方が変わってくるのではないでしょうか。

すでに計画書に書いた内容や上記内容の他にも、夏休み中ふとした時に「あれ？」と思ったことがあ

れば、その背景などをじっくり調べる、そこからまたやってみたいことが出てきたら、もちろん内容の軌道修正を行ってもらって構いません。

所詮、日本に住んでいる私たちが、そんな真似事をして何になる?!めんどくさ～と思う人がいるかもしれませんね。でも、めんどくさ～と思うことこそ、いかに受け入れ、そして自分なりに意味のあるものに変えていくかを考えるきっかけとなるし、それが異文化理解の第一歩なのではないかと思います。真似事であってもまずはやってみるのはどうでしょうか。頭で理解した「おもしろそう」「つまらなそう」「おいしそう」「汚そう」「かわいそう」「痛そう」…と実際に体感した後に出てくるそれらの言葉とはまた一味違ったものになると思います。

だれにでもできる、本で読んで、テレビで見て、人から聞いて異文化を理解するところから、さらにもう一歩踏み込んだ、オリジナルの異文化理解をしてみようではありませんか！

夏休み後のレポートを楽しみにしています。

暑い夏、体調を崩さないように注意をして、充実した時間を過ごしてください。

＜別紙５＞

## 2001年度　２年生　異文化理解夏休み課題レポート

○　Ｏ.Ｅ.（梅）　＜インドの人々の宗教観を知る＋イスラム教＞

・断食１日より。継続できなかったのは、断食の意義が自分に存在しなかったから…。宗教とは＜信＞から＜行＞が成り立つものであるから、断食は苦痛とはまた違う次元かな…。

○　Ｔ.Ｍ.（菊）　＜本場インドカレーを作り、手で食べる＞

・スパイスは野菜にある食物繊維（消化・整腸）代わり。いくつか入れることで、野菜と比べ「独特な味」ができ、かつお腹に良いという一石二鳥のような感じ。

・上手く口の中に運べない。途中でポロポロ米粒を落としてしまった。

・手が熱い！

・手で食べるのは、他人の唾液を通じて感染しかねない不浄を避けるため。誰が使ったかわからないスプーンを使うより、自分の手の方がよほど信用できる。

○　Ｋ.Ｉ.（蘭）　＜カレーとインド＞

・私たちの＜不潔＞とインド人の＜不潔＞は違う！

インド人がフォークとかを使わないのは、自分より下のカーストの人が使ったかもしれないという恐れがあるから。今まではフォークとかが買えなくて手で食べるのかと思っていた。インドでは＜汚い手で食べても平気なんだ＞と考えていた。

・<そうめんを手で食べる>でウオーミングアップ、そしてカレーを手で食べるにチャレンジ。手が熱くて食べられない。それは日本人が平気な42℃のお風呂に、外国人が熱がって入れないのと同じ。習慣次第で出来るようになることもあると感じた。

・確かに「手で食べること」に慣れていない私たちからすると気持悪い。しかし、パンとかは手で食べるのに、なぜ他のもの（ごはん・そうめん・おかず）は駄目なのか？

・K母、「手で食べ、お尻もふく」ことに抵抗感あり。「カーストにこだわっているのかねー、どうだっていいことを気にするのねー。」

○　K.A.（菊）　<カルチャーショック>

・フランス人はあまりお風呂に入らない?!

・イスラム教徒の女性、ヴェールをかぶっているのにどうやってお嫁さん選ぶの？

・だんなの蒸発、平気なメキシコ人?!

・生理のときは台所に入らないインド人女性　⇒海士部の友人（ヒンズー教徒）もそうでした。

・結婚式や葬式に現金をあげるのは変？　⇒相手を思いプレゼントを選ぶ手間にこそ価値がある。

○　T.Y.（梅）　<ばらぽろ日本語　～地域に根付く方言、東京まで聞こえる方言～>

・方言チャット…自分の打った標準語が広島弁や大阪弁などの方言に変換されてしまう?!

地域語は県民の癖をよく反映し、なまり、生活に密着した言語。標準語はその地域臭さを最大限なくして、多くの人々に通じることを目指した万能薬。標準語に近い言語を話す私たちには方言はやはり癖のあるものだと感じる。東京語の標準語化が示すように、東京の生活習慣、文化、そのものが地域臭さのない、いたってノーマルなものだから…。

東京って変な場所！っていうそっけないところも東京の個性か?!

○　Y.M.（菊）　<韓国の食事マナー　～肘を付いて、立ち膝でご飯を食べる～>

・立ち膝をするのは、民族衣装のチョゴリをきれいに見せるため。日本で悪いマナーである立ち膝も、チョゴリというものを通して見てみると、すごく合理的だし、美的センス的にもとても納得できた。日本の着物が正座をすることで、まっすぐなラインを保てると言われるのと同じ?!

・しゃっくりの止め方のあれこれ

・笑顔の写真を撮る時のあれこれ

○　S.S.（梅）　<イタリアと日本>

・「ガス入りの水?!」慣れてからは、好んで飲んでいた。向こうで過ごすことによって、そこの文化を自然に身体が受け入れるようになる?!

・トイレの横にはこんなものが…。

・なんと公衆トイレには便座がない?!

○　N.H.（梅）　＜肉断ちをして…＞

・異文化を理解しようとしてやっていたのに、軽々しくやりすぎていた。自分はその宗教ではないけど、理解するには心ももっと近づこうとするべきだった。自分は食べちゃっても「あ～あ」で済むけど、本当だったら…

・環境も大切。日本のように豚肉を直接買ったり食べたりしなくても、エキスなどで口に入ってしまうような環境ではなかなか肉断ち実践は難しい。イスラム教圏の国々ではコンビニとかあっても、豚肉入りの物は売っていないのではないか？⇒マレーシアにいた友人から答えを聞いたよ。

○　O.Y.（蘭）　＜日本の漫画文化＞

・日本に来たばかりのとき、本屋に置いてある漫画の数に圧倒された。『日本人はどうしてこんなに漫画が好きなのか？』想像力が乏しい場合、小説を読んでもなかなかその情況が浮かんでこないが、漫画だと容易に理解できるからか?!「郷に入れば郷に従え」という言葉は好きではない。身が異国にあるからといって、精神までもその土地に合わせなくても良い。「私は外国から来ているので、違って当たり前じゃん」と開き直る心も大切。

・日本の漫画は色々な国で読まれ、他国の漫画文化に影響を与えている。誇りを持って良いのではないかと思う。

○　O.K.（梅）　＜日本の箸マナー＞

・箸は＜はさむ文化＞。突き刺したり、すくったり、掻き回したりしない。

・＜きらい箸＞…直箸、二人箸、箸渡し、握り箸、逆さ箸、先箸…　箸に関する言葉が一杯。

・世界には３つの食法がある。＜手食44％＝パン・野菜・果物＞＜フォーク食28％＝肉食＞＜箸食28％＝ねばねば・ジャポニカ米＞

・９日間の実践…事前に調べた箸の持ち方、取り方、使い方、タブーのあれこれ、マナーなどを気をつけながら食事をしてみた。この実践を終えて以降、大野家で続けられることはなかった…。

・箸は＜日本の文化を生んだ＞といっても過言ではない。食事時の一道具としてしか見てこなかった箸にこれほど歴史があったなんて…。「異文化理解＝外国の文化を理解する」とばかり思っていたが、実は日本国内にもたくさん異文化が存在していたのだ！

○　A.M.（菊）　＜スペイン５回の食事＞

・１日分を５食に分けて食べてみた⇒午前中はつらく、午後は満腹。１日３食に慣れすぎている

・自分の知らなかった文化や理解できない文化を＜変＞だとする物の見方は、自分の国の文化を基準に見ている自己中心的なもの。

○　Ｉ.Ａ.（菊）　＜私の異文化体験＞

・韓国のように肘をついて食事をしようとした。家族にまず承諾を得ようとしたところ、父親が「そんな行儀の悪いことは絶対にさせないぞ！」と大激怒。この激怒こそ理解できなかった。時代の違いか?!私たちとは違った感情があったのか?!

○　Ｋ.Ｎ.（蘭）　＜コミュニケーションについて＞～障害者交流館でのボランティア体験～

・こちらの言いたいことは理解してもらえるのに、向こうの言いたいことを理解できなかった。いかに今まで自分が＜ことば＞に頼って生きていたかを実感。

・「自分が楽しくないと、子供たちも楽しくないと思うから、もっと気楽でいいのよ。」と先生に言われた。自分には本当に余裕がなくて駄目だな～。

・私たちにとっては何気ないプール。しかし、発作のある生徒にとってはとても危険なもの。ボランティアはただ介助したりするのではない、相手の立場になって考えることで初めて相手の役に立てる。もっと大きな視点で物事を見れるようになりたい。

・一般の人も、身振り、手振り、表情などノンバーバルな要素を多く取り入れてコミュニケーションをとっている。手話の人にとっては、相手に意思や考えを伝える手段である。コミュニケーションで大切なことは、言葉ではない、伝えようとする気持さえあれば、おのずと道は開ける。

○　Ｈ.Ｙ.（蘭）　＜体験！！異文化vol. 1＞

・ティッシュを使わず用をたす…＜小＞気持悪く、仕方なく下着を取り替えた。＜大＞そのまま立ち上がり、トイレを出ようとしたら、母親とご対面。思わずトイレに戻り、きちんと拭いてから外に出た。それ以降、チャレンジすることはなかった…。⇒もちろん拭くのよ、手でね。

・体験してみて思うことは、その行為に対する直接的嫌悪感よりも、自分が＜変＞と思われるのではないかという周囲の目に対するおびえ。自分だったらその行為をしている人を見た時＜変＞と思うから。

○　Ｔ.Ｅ.（梅）　＜イスラム教＞

・10時、12時、14時、17時、20時の礼拝を2日間やってみた。祈りの内容は、困ったときの神頼み。やってみて、１日中落ち着かなかった。小刻みに祈らなきゃならないし、方向も確かめなきゃならない、本当に面倒。１日５回の礼拝を一生続けるなんて相当信心深いのだなー。

宗教は、やはりその宗教を信じている人にしか、真の意味はわからない。逆に言えば私たち日本人

の方が理解しづらい人間なのかも…。異文化を理解する第一歩は宗教だといってもいいのかも。

○　R.（菊）　＜なんか変！　何が違う？＞

・チリと日本の大きな違いは、あいさつとお風呂の習慣。ホストファミリーにキスのあいさつをしたいのに、しようとすると彼らは引く。公衆浴場でみんなと入るお風呂には驚いた。チリでは完全にプライベート。

○　A.（蘭）　＜夏休みの課題＞

・ファッション、食べ物、東京のまち…。でも特に、相手の顔をじろじろ見ながら話すところがビックリ。日本ではそれが大切なこと（？）とわかってはいるけれど、私の顔から何を探そうとしているのか、何かついているのか…と不安になる。

○　C.（梅）　＜夏休みの課題＞

・宗教について…日本ではあまり宗教に馴染みがないようだ。変だなとは思うが、別に間違いではないと思う。

・一般の生徒について…オーストラリアの学生生活とは全然違う。教室でなぜ先生だけが話しをするのか？日本の授業では、長い討論の時間もないし、色々な考えがたずねられることもない。

・異文化を理解するために…日本に来てたくさんビックリすることを経験したが、結局良いとか悪いとかではなく、ただ違うのだと思うようになった。みんなもこのことを理解できれば、人間関係はもっと簡単になるだろう。

○　W.Y.（蘭）　＜中国トイレ事情＞　～実際中国に行ってみて～

・中国トイレランキング１～５位。様々ある中国のトイレ。共通していることは、男女は分かれているということだけ。あとは日本の洋式トイレと変わらないものから、身を隠すもの一切ないもの、穴の下で豚が待ちうけているものまで様々。中国は広い！

・なぜドアがないのか？考察

・なぜ中国のトイレはドア側を向いてするようになっているのか？考察

・今まで私が１年間学んできた＜異文化＞は本当に異文化だったのだろうか…。そう思うほど、今回中国で体験した＜異文化＞は色濃く、力強く目の前に立ちはだかった。思えば去年私たちが学んだ各国の文化は、日本の文化とは異なっているものの、割合い受け入れやすく、理解しやすいものばかりだった。でも本当の＜異文化＞というのは、そのずっと奥にあった…。後日談のように書くのはたやすく、ニーハオトイレをランキングしておもしろがることも簡単である。しかし、実際にトイレ、蛾の幼虫、銭湯などを目の前にして「さあ、やってみろ！」と言われると非常に難しい。本

当に！！自分のいつもの意識をすて、新しい意識を作らないといけない。これに結構時間がかかる。＜恥かしい＞＜気持悪い＞という感覚を捨てるのって想像以上に難しい…。

中国語を勉強し、餃子を作り、月餅を食べて＜中国文化理解＞などとは言えない。トイレに入り、幼虫を食べ、銭湯に入る…。裏の面での文化を理解しない限り、＜中国文化＞なんて理解できない。私たちはむしろこういう裏の文化こと学んでおかなければならない。トイレ、幼虫、銭湯、断ろうと思えば断れた。しかし、映像や字面で文化は理解できない。自ら体験して初めてその文化を理解し、認めたことになる、そう思ったから私は体験した。そして、たくさんの友だちができた。異文化理解って難しい…。でもものすごく大切！！

＜別紙６＞

# Self Introduction

Name：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　Sex：M ／ F

Birthday：19＿＿＿＿／＿＿＿＿／＿＿＿＿　(Age：＿＿＿)

Address：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1．How many people are there in your family ?

2．What is your favorite subject ?

3．What is your hobby ?

4．What do you want to be in the future ?

5．What is the most important thing for you ?

6．When do you feel happy ?

7．When do you feel sad ?

8．When do you feel irritated ?

9．When do you feel peaceful ?

10. What do you want the future world to be ?

Please write more about you

Don't write/paste anything here

＜別紙７＞

# 2001年度　２年異文化理解　MTGメール交換プロジェクト　＜回覧用プリント＞

（「異文化理解」メーリングリスト用メールアドレス：ibunka@＊＊＊＊＊＊＊）

＝*HOW-TO*＝

・各班で、返信メールを書いて送る順番を決めておく。

・次回の担当者は、隊員の方から次のメールが届くまで、週に最低２回（月・金か火・金）はメールチェックし、メールが届いたら上記のMLのアドレスに送る。

・木村 or 海士部から隊員の方のメールのコピーをもらい、この用紙をつけて班で回覧し、全員に次回の返信メールで聞きたいことを書いてもらう。質問する内容には、それぞれが夏休みの宿題でテーマにした体験的レポートに関連したものを必ず入れること。

・回覧し終わったら、このプリントを元に返信メールを書いて、隊員の方と上記のMLのアドレスの両方に送り、再び木村 or 海士部から隊員の方のメールのコピーをもらって、班で回覧する。

・回覧したプリントは、全て班長が保管する。

・隊員の方に返信メールを出した翌日以降は、次の返信メール担当者が、隊員の方から次のメールが届くまで、週に最低２回（月・金か火・金）メールチェックする。（以下同じ）

班名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿班　　（班長氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

返信メール担当者順番一覧

| | 氏　名 | クラス |
|---|---|---|
| １回目 | （　　） | [　　] |
| ２回目 | （　　） | [　　] |
| ３回目 | （　　） | [　　] |
| ４回目 | （　　） | [　　] |
| ５回目 | （　　） | [　　] |
| ６回目 | （　　） | [　　] |
| ７回目 | （　　） | [　　] |

（　　）月（　　）日　発　　★最後の人は＿＿＿組の＿＿＿＿＿＿＿まで。

隊員の方の返信メールを読んで、今回の返信メールで各自が聞きたいことを以下に書いて次に回してください。

＜別紙８＞

2002．2．16

# 2001年度　２年「異文化理解」最終レポート提出について

次の３つのレポートをまとめて、３月11日(月)正午までに教官室木村の机上に提出すること。なおこのレポートは、提出後印刷して冊子にし各自に配布するので、印刷に耐えうる見やすく濃い字で書くこと。

**①　夏休みレポート拡大VERSION**

その後の調査や隊員とのメール交換の中でわかってきたことなどを含めて、元のレポートを膨らませる。(数ページは増やす。)

**②　協力隊員とのメール交換で得られたもの＋赴任国について調べたこと**

隊員とのメールでわかったこと、班で調べた赴任国についての概要、さらに自分で決めたトピックについて調査し、まとめる。Ｂ５　８枚以上。

**③　１年間の「異文化理解」の授業を通して得たもの＋考えたことなど（ブータンの高校生の手紙などを通してわかったことや考えたことなども含む）**

この１年間のさまざまな体験・調査等を通して、何を感じ、何を考えたか。

特に自分の中で、物の見方、考え方、行動に変化があったと感じられることについては具体的に書くこと。Ｂ５　２枚程度。

注）①②については、参考文献を明示すること。(インターネットのみの資料ではダメ。必ず書籍にもあたること。)

≪参考資料≫　(各班員の調査内容、および関連のインターネットアドレス・書籍類)

☆ブルキナファソ☆

・アフリカ全般の家族の様子（役割分担・人数・行事など）

・食事情

・民族音楽（歌・踊りなど）

・医療・衛生事情（マラリア、トイレなど）

・雇用・収入・“世界で三番目に貧しい国”であることを検証

・さまざまな族

◎http://www.med.kutc.kansai-u.ac.jp/%7Eburkina/（現在赴任している青年海外協力隊員10名の日常を知ることのできるHP)

◎ http://tdmo2.med.kutc.kansai-n.ac.jp/%7Emeetg/（MeetTheGlobe ミート・ザ・グローブの HP。隊員のHPにもリンク)

◎http://www.jca.apc.org/sahelnet/（サヘルネット。西～中央アフリカの情報が得られるHP）

◎http://ww.jca.apc.org/sahelnet/allafrica/link.html（サヘルネット。アフリカに関するリンク集）

☆ベトナム☆

・年間行事とその祝い方（旧正月など）

・アオザイ・日常の服・下着・洗濯方法

・日常的に購入するもの・おやつなど

・学生の一日・社会人の一日

・衛生用品・料理・服装（アオザイ）・雑貨・ベトナム料理（牛の料理が多い理由）

◎http://www.hotnam.com/lifevn/（ベトナムの祝日・記念日）

◎http://www1.linkclub.or.jp/~yaksa/（ベトナム文化研究院）

☆フィリピン☆

・行事（祭り中心）

・行儀・マナー

・スモーキー・マウンテン

・アブ・サヤフ

・服（民族衣装）

◎http://www.mmjp.or.jp/inter-island/atiati/（祭り）

◎http://www4.justnet.ne.jp/~offifour/（映画「神の子たち」HP）

☆その他☆

◎http://develop.bento.ne.jp（Developing World。中高生用掲示板あり。）

＊他にも各HPにリンクしているさまざまなサイトがあります。参考図書類もそこから探すことができます。

＊本校図書室にある参考図書類＊

◎「図説大百科　世界の地理」全24巻（朝倉書店）

◎「ビジュアルシリーズ　世界再発見」全10巻（同朋舎出版）

◎「週刊朝日百科　世界の地理」全12巻121冊（朝日新聞社）

◎「世界の民族～熱帯アフリカ～」（平凡社）

◎「事典東南アジア～風土・生態・環境～」京都大学東南アジア研究センター編（弘文堂）

◎「地球家族」「続・地球家族」（Toto出版）→これは海士部先生のところにあります。

① 1年間の授業を終えて

1年間この異文化理解の授業をうけて、私の中でいくつかの考えが変わった。

まず変化の1つとして私が感じたことは、ある番組の特集で、アフリカのある国ではオランウータンやチンパンジーの密猟が行われ、食肉として市場に売り出され、子供はペットとして売られているということを取り上げていた。これについて、その番組に出ているタレントたちは「許せない」と口々に言っていたが、私はそうは思わなかった。チンパンジーやオランウータンはその国の人々にとっては もともと食料だったのではないかと思う。彼らにとっては「密猟」ではなかったのかもしれない。ただ、チンパンジーやオランウータンは保護しなければいけない。ここで特集すべきだったのは なぜこの国でチンパンジー、オランウータンが食料になっているのか、どうすればそれらを他の動物に変えることができるのかについてだったと思う。「日本人」としての目からだけ見るのではなく、その国や地域の人々の目から見ることが大切だと思う。そして、その時私は少しでもその国の人々の目から見ることができるようになっていたのだと思う。これは異文化の授業の成果だと思う。

もう一つ、「貧しい国」についての考え方が変わった。今まで私は「貧しい国」というと、少し気の毒に思ったり、日本人で良かったなどと思っていたが、青年海外協力隊員の方とのメール交換で、世界の最貧国の1つであるブルキナファソの隊員の方からのブルキナの様子についてのメールを読んで、ブルキナの人々はとても活き活きと生活していることがわかった。「貧しい」というのは世界的に見たその国の特徴であって、その国の人々は貧しいかもしれないが、その生活を楽しみ、その中で生活しているのだと思う。

ここでも「日本人」としてではない見方をできるようになったのだと思う。

私が異文化理解の授業をとったのは、日本以外の文化について単に興味があったからだった。しかし、今授業を終えてみて、この授業は私の興味・関を満たすだけでなく、様々な新しい情報を与えてくれたと思う。そして、それらは得がたいものだと思うし、一生役に立つものだと思う。授業はあまり多くなかったけれど、とても面白かったし、勉強になった。

②

私は二年間この授業をやってきて、楽しい授業だったと思う。思い返すと、いくつか印象に残っていることがある。

。留学生との交流

一年のときはテレサとフリダ、二年はロサリオ、アンディ、クレアが参加してくれた。短かい時間だったが、それぞれの国、地域の習慣、教育システムを理解した。例えば、ロサリア、アンディ、クレア3人が寝る前におやすみのキスがなくて寂しいとか、学校に来てもあいさつとして抱擁することがないとか、いろいろ言ったのを覚えている。それでロサリアが学校に来る最後の日に、廊下でばったり会って、私はおもいっきり抱擁してあげた。書くほどのことではないかもしれないが、私の心の中では一つのやりたかったことをやり遂げた達成感があった。(ちょっと大げさすぎ!) おそらく、もし欧美諸国に行くようなことがあったら、そのときでも人がいてしまいそうなあいさつのしかたなどに早く慣れることができるのだろう。

。食文化の理解

各国の料理を作り、味わうことが私たちにとって異文化を理解するのに一番手、取り速いのかもしれない。先生方もそう思ったのか、調理実習をたくさんやらせてくれた。一年のとき、一回目の調理実習は中華だった。私がメニューを考え、レシピー、作り方を書いてくることになっていた。しかし、私の家で料理を作っても、いちいち小麦粉○g、ベーキングパウダー○gといったことを考えない。すべて目分量で行なわれる。それをきちんと数量化することが私にはとても大変なことだった。その時私が思ったのは、今まで自分があたり前のようにやってきたことを、それを体験したことのない人にわかりやすく説明するのはどんなに大変なことか、ということだった。二年のとき、協力隊員とのメールのやりとりを始めて、協力隊員は私たちの質問をいつも丁寧に答えてくれた。派遣されて数年間しかたっていないのにすごいな、と思った。私も自分の国のことをもっと知らなければならないと思った。

。ブータンの高校生との交流

ブータンの高校生のほとんどが家族をとても大事にしているのが印象的だった。中国もみんな独り子だから、父親や母親と仲がいい。日本の子供は、私からみると親ばなれしているというか、親孝行が足りないというか、そんな感じだ。もちろん、私も親は私のことを何も知らずに自分勝手なことを言っていると思うときがある。しかし親のことを「うざい存在」とくらえたことはない。意見が衝突したら、すこし反抗しても、結局は親の言う通りにしている。教育研究会のときに見たビデオで、大事なものは自分の携帯だと答えた女の子がいた。そのとき、周りで「えー」とか「『大切なもの』の次元が違う」などの声が上がっていたので、私はすこし安心した。それでも、私たちの中で、ブータンの高校生のように家族を大切にしているのか考えさせられる。物質が豊かになると、人の心も変わるとはこういうことだな、と思った。家族の絆というものをとりもどすべきだと思う。

参考サイト

シンチャオ ベトナム料理
http://home.att.ne.jp/alpha/VN/cooking

参考文献


。世界国勢図会 2000/2001 国勢社

。ベトナムごはんまるごと案内 岡村のぶり 晶文社

。ベトナム情報事典 烏合文社

NO.
DATE

③

1年間の異文化理解の授業を通して

▼ ブータンの人からの手紙のとき、どこかの班が挙げた項目が、「なぜみんな青インクなのか？」だったと思う。それを見て私は、ふざけてやったのかと思って笑っていました。全然真面目な話題だと知ったとき、今だに「これは何でなのだろう」と疑問に思うことがある特定の範囲でしかできていないということを思い知らされました。みんなそれぞれの観点を持ち、意見を持った人の中で、（回数は少なかったけど）授業を受けたのは、なかなかの刺激でした。"与えられた課題"をこなすのではなく、"課題を見つけて"こなすことがすごく難しいと思いました。でも、今の日本の教育に必要なのは、後者の方なのかもしれないと感じました。

▼ 留学生と接する機会はたくさんあったはずなのに、「自分から声をかけられない自分」に気がついた。話すことがなくても話しかけるくらいの積極性がないと、社会に出たときどうなんだろう…と思った。

▼ ブータンの高校生の手紙を読んで、(貧)と(富)で考え方が違うのか、（いや、教育も関わっていると思う）とか、両親に対する思いの違いというのを実感した。それまでは大して意識もしなかったけど、親の重みについて考えさせられた。私の家はみんなに比べて貧しめだけど、親が"子供のため"に働いてくれているのがよくわかる。なんか感動してその後はよく手伝いとかするようになった。「将来イイ仕事に就いて親に楽させたい！」というブータンの高校生の気持ちがすっごい――――くよくわかった。（と思う）
自分の楽しみの妨げになる子供を虐待、殺してしまう親というのは、外国にもいるのだろうか。何かの巡り合わせで親子としてこの世に存在しているのだから、お互いプラスとなる関係でいたいなぁと思った。

▼「百聞は一見にしかず」という意味をとことん実感した気がします。
遊びでは初めてのものは"かりて"、なんとなく全世界共通な気がしていただけに驚いたし、料理ではそれぞれの国はこんな感じなんだ"（一部にすぎないと思うけど"）というのを体験できた。
また意外だったのが、「現地にいる人がいちばんよく知っているわけではない」説。海士部先生が「ブータンのこと聞かれたら全部答えられるとは思えない」と言ったので、少し考えてみた。私が柏のこと聞かれたら…？

NO.
DATE

「あ、確かに何も言えない」と思った。「現地にいるから知ってる」わけではなく、ちゃんと勉強してたり体験してみたりしているから知っているのかな、と思った。「それは外国にいるから観察しようとしてるだけ」と言われるとそんな気もするけれど、何処にいても「観察」するのは大事なことだと思う。最近、私が気づいたのは、（地元周辺）ちょっとした空き地にオオイヌノフグリが咲いてたとか（雑草だけど）冬は空がきれいで星がよく見えるとか、私の部屋からオリオン座がよく見えるとか、柏の高校生はマナーが悪くて怖いとかそんなことです。結構当たり前すぎることって見過ごしているのかもしれない、と思いました。

▼ 異文化理解になった時、正直がっかりしました。そして始まってみてレポートが多くて嫌だなぁと思いました。（←自分で希望に書いたくせに。）
でもそれまでの自分を思い返してみると、決められたことをそのまま実行したり、決まっていることを勉強することが好きでした。中学の時嫌いだったのは、美術の自由課題と"自由"の班決めて作文の自由課題でした。
要するに、自分で考えることを嫌っていたのです。でも異文化の授業を受けて、どうしても考えないわけにはいかなくなりました。
今でも「自由」と言われるとやっぱり嫌だなぁと思うけれど、前よりは全然「自分で考え」ようとしているはず"（と思いますが）。
あと、クラスが違うため余計なのですが、グループでの行動がすごく難しく、他人に対する責任を強く感じることもありました。
記憶力があまりないので、何か筋違いのことを言っているかどうかはわかりませんが、1年間の異文化の授業は私にとって新しく、大変で、色々な体験をさせてくれました。"楽しいかどうかはやってみなくちゃわからない"ことも教えてくれました。レポートとかみんなに比べたらはるかに劣るけど、みんなの凄さも実感できました。どうもありがとうございました。

▼ ナマスカはやっぱり最高ですね。

④ [illegible]

この1年間異文化理解の授業をやって、特設時間数は少なくなったけど、内容はすごくもりだくさんで、濃かったと思う。

夏休みのレポートでは、調べるだけじゃなくて実際にカレーを手で食べてみた。手で食べるのは汚い感じがしたし、食べている時も抵抗感があった。それでも手で食べたからわかったこと、手の方が扱いやすい、ということはあるなと思い、また、「自分の手だから一番信用できる」というインド人の考え方も少しわかった。

そしてこのレポートで、イメージを持ちすぎていたインドというものを少しは壊すことができたと思った。経験してみない事には机上の空論、まずやってみる！という姿勢異文化理解クラスの指針(?)にも納得できる。一般常識や思いこみが崩れていった夏休みのレポートだった。

夏休み明けの文化祭ではODECO共和国とセーブザ・チルドレンのバザーをやった。みんな12/1人忙しい合い間をぬった準備して、バザーも売り上げてセーブザチルドレンに寄付。
私達は募金しかできない そういう無力感に沈むことなくパネル展示やみんなのまとめ役だった渡辺さんはすごいと思った。それから自分達はもっとできることがあるんだなという事もわかった。

夏休みに社会でストリートチルドレンを調べた事があり、子供の救済を行っているセーブザチルドレンを応援したいと思った。
先日、西本さんのテーマのスモーキーマウンテンの本（写真の本で、「ごみと宝石」という題名）を見ていたのですが、まず圧倒されたのが表紙の笑顔。なんで楽しそうに笑えるんだろうと思った。紙幣にかかわった。その写真の本を作ったのがセーブザチルドレンだとわかった時、夏のバザーを思い出して、ああ、バザーをして、パネル展示してよかったなと思った。



それからナマスカにみんなで食べにいったこと、楽しかった。
そして一番辛かった!! 後に尾をひく辛さだ!! アンディ、クレア、ロサリオのお別れ会でもあった。特にクレアとロサリオは、クラスが違ったけど異文化理解のクラスを通して仲良くできてよかった。フィリピン班はロサリオ1人いなくなっただけで急にすごく減った気がしてさみしい。異文化全体でも3人がいなくなるとすごくいなくなった様に思う。

私は今まで社会とか、国際的な事に興味もなくそのまま素通りしてきた。
高校1年で異文化に入って、毎日毎日触れざるを得ない状況にあった時、自分の好奇心はこの中にもあるんだな、と発見することができた。
事実、この前図書館にいったらフィリピン関係以外でも借りたいなと思う本があすぎて、その中からがんばってしぼるという事態がおきた。以前なら考えられない事である。

メールのやり取り、ブータンについて、両方ともいまいちなことでとまどったし、最後の方だったので、メールはいい所で終ってしまいそうだし、ブータンとも中途半端で終ってしまった。ブータンの子に少し悪いなと思った。

異文化理解に入って、今まで無関心だった世界の動きなどを少し注意して見て、自分なりの意見を持つようになった。例えば、イラン・インドの事について親に自分の意見を言ったり説得したりするようになった。

それから国際協力について身近に考えられるようになった。
今までなかった好奇心が育っていったと思うし、これからもその好奇心を持ち続けたいと思っている。夏休みのレポート、文化祭、メール交換などなんで異文化だけこんなに大変なんだろうと思ったりするが（今も大変苦労してこれを書いているが）2年間で、知ったこと、経験したこと考えたこと調べたこと自分の意見を持ったことは自分の力になったと信じている。

No. 1

DATE

(5)

この一年を通じて、まずは一年生のときより いろいろな国について知れたことが収穫である。調べたりするとき、どうしても資料の多い先進国を選んでしまいがちだったので、途上国について調べるのは、大変だったけれども、また違った楽しさを知れてよかった。今回という貴重な機会を得られなかったら、私は自分の中にあった偏見という意識に気づけなかったと思う。それに、私は幸せボケをしていたと思う。日本という裕福とされる国に生まれ、父母や祖父母から「貧しかった頃」の話を聞かされ、「あなたは幸せなのよ。」と何度も言われた結果、「私って幸せなんだあ…恵まれていない貧しい状況は不幸せなんだなあ…かわいそう。」という勝手な思い込みをしていた。何をもって"幸せ"とするのかは、人それぞれであるし、もしかしたら恵まれているということが、却って不幸せかもしれないのに思い込みは恐い。人の心を鈍感にしてしまう。また、幸せボケに陥らないように、他の事を詳しく知り認めることを大切にしていきたい。

それに、異文化を"体験"することがたくさんできたのも収穫の一つだ。本やインターネットで容易に知識は得られるが、それは充分ではない。"体験"することで、そのことを肌で理解することで、初めて「わかった」と言えるのだと思う。授業回数が少なく、レポートという強敵はあったものの、この授業で"体験"した遊びや食といった身近な異文化は忘れられないものである。一人ではなかなかできないことをみんなでやることは楽しかったし、よい経験となった、と思う。

最後に、毎回のレポート提出やメール交換、文通などいきなりの新しい試みにはビックリで最初は嫌だな…と思うことが多く苦痛だったが、それに耐え根性すらついた気がしてならない。

はっきりいって、「私は～変わった」と断言できるところが、まだないが、私なりに異文化理解をエンジョイすることができたというのは言える。何も知らなかった頃にくらべて、調べたり、体験したり、考えたりといったこの授業を通じて得た物は手ごたえがある。あとは、この得たものが私をどのように変えていくのか楽しみでもあるし、更に育てるというか新しい興味や関心を通じてもっといろいろなものを得て



No. 2

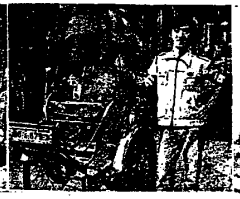
DATE

いけたらいいと思う。

「異文化」を「理解」することは、「自分」について「理解」することでもある。他を知る、そのことでより自分というものを確立していくのだと思う。他というのがあってこその「自分」なのだから「自分」一人で生きているというふうに思ってはいけないし、他に支えられて成り立っている「自分」を知り、他に感謝する「自分」でなくてはならないと思う。同国の人との関係が希薄になる傾向の現代、と同時に「国際化」が騒がれているわけだが、「自分」なくして「国際化」は成り立たず、「他」もなくして「自分」は成り立たない。結局は「国際化」も「自分」と「他」との延長線上にある。目先のものだけでなく本質を見抜ける、広い視野の人間でありたいと思う。

# ⑥1年間の異文化理解の授業を通して…

1年間の「異文化理解」の授業は長かったようで本当に短かった。(あっ!、授業数が少なかったのか!笑)
私は去年に引き続き、2年間、異文化理解の授業をうけてきたわけだが、2年生での異文化理解の内容は1年生の時のものよりもはるかに濃いものだったと思う。確かに夏休みや今回のレポートなどは要求された枚数も多く、内容的にも大変だったけれどそれだけ得られたものも大きかった。
去年の春休みに私はユネスコの短期留学で韓国に3週間ホームステイをしたのだが、その時、すごくカルチャーショックをうけたのを覚えている。韓国について少しは勉強していたにもかかわらず、現地で実際に見たり、触れたりしたものは想像していたものとは全く違った。あれだけ日本と距離的にも近い国。飛行機なら2時間半程で着く。しかし、実際にはまだまだ遠い国であることがわかった。
「異文化理解の授業は、そのおもいを更に深めていってくれたと思う。
夏の「おはしレポート」では、まだ自国日本の文化にも知らない部分がたくさんあることを知った。そして、グローバル化という言葉にひかれて、外国ばかりに目を向けるのではなく、まずは自分の国をもっと知る事が真のグローバル化につながるんだという事を実感した。(だから、今、私は木村先生のように日本の行事を大切にしている!)



また、「ベトナムレポート」では、寺西さんとのメール交換を通して、本やHPだけの内容にまどわされてはいけないということを知った。はじめは、「こんなメール交換、いったい何になるんだろう」と思ったのだが、メール交換をすすめていくうちに「現地からの生の声のリアルさ」に感動していった。

1年間、レポートや調理実習や遊びなどを通して、とても世界が広がった。とにかく、広がった!
異文化理解内の友達の発表をきいて、たくさんの知識を得た。また、レポート作成で本やインターネットやメールから教わったこともたくさんある。
だから今度は教わるばかりではなくて、得た知識をフルに使って、知らない人に教えていきたいと思う。(また、文化祭でそういう場《異文化共和国のような》を持てるといいなぁ)

木村先生、海士部先生、
1年間どうもありがとうございました。

## ⑦ 異文化の授業を通して

協力隊員とのメール交換は、今回のレポートを作成する際に、本当に役立った。最初、わけもわからぬまま質問をし返事が返ってきて「へェ〜そうなんだ」と思って、面白かったけど何をしたいのか良く分からなかった。けれど最終的にやっぱりレポートを書くとなると、本やインターネットのの調査だけでは、分からなかったであろう情報をいっぱい提供してもらえた様に思う。私のレポートの具体的な内容が決まらなかった時にベトナムコーヒーのことを教えてくれたのも寺西さんだったし!!! ただ、レポートっていう目的で、こっちももっと前から自分のテーマを意識して質問していった方が良かったかも。そうしたらもっと追求した内容が知ることが出来たかも…って思う。

今年度の授業は、先生たちが「体験」がテーマだと言っていて、確かに日本国外ともつながりを持ったし、夏休みの宿題も体験することだった。そこでやっぱり得たものは、今まで資料を集めて、はい、まとめて、感想書いて、終了。という作業に満足していた自分を見直せたことだ!! 理解するつもりの気持ちがあるなら、実行出来ても、結局出来なくても知る、一歩踏み込んでいく姿勢が一番大事だったのかも知れない。

私にとって「異文化理解」っていうのは、最初、"知る事は楽しい。自分たちと違うのも、文化はそれぞれなんだからいいじゃん"でした。今もその根本は変わってませんが、少し変わったのは、ただ十人十色だから…みたいに軽く受け流して、知らんぷりをするのでなく、自分が受け入れられなくてもいいし、異文化に同調することが理解でもなく、まず、知ろうとするということ、そして理解というのは文化を、ではなくて、"その文化で生きる人々"を理解する、認めるということが異文化理解ということではないか…？と思いました。

結局、異文化理解という言葉1つとってみても、深くって、異文化メンバーでも受け取り方が様々なのではないかと……。

英語の教科書の文章にあって、ちょっと印象に残ったこととして、結局、日本国内でだって納豆食べられる人とそうでない人がいるように、その国で当然。と思われていることだって、好きな人は好きだし、嫌いな人は嫌い。国境やその他区分の違いだけではないと思いましたねぇ。異文化って。…意味通じますかね!?

ええっと…とりあえず今 明け方 5:15 で、そろそろヤバ〜イので感想はこんな感じで終わしたいのですが。(レポートでコーヒー飲んだからカフェインでなかなか徹夜頑張れたわ!!) でも頑張って仕上がった!! 万歳!!

ぬる〜い感じで終わりますが、今から寝ます。オヤスミ!!

余談

ぶっちゃけ、今年度の異文化、めんどくさ〜い!!ってこともしばしば…(笑) お料理も、後半はほとんど出来なかったし、課題や提出物すごく多いし!!!

ただ、内容は濃かったよネ♥♥♥

**ODECO楽しかったワ♥♥**

私は前から個人的にフリマがやりたくて、それが実現したのも嬉しかったんだけど、何か、売り上げ金が自分のふところに入らなくても充分楽しくて満足♥ 国際協力って、何も「自分の中でちょっとがまんして…」ってする援助だけじゃ全然ない!! フリマは楽しく国際協力!! かなり売れたし!! いい事したねぇ〜。 (終)

# ⑧「異文化理解」を考えて

２年間続けた。私は何をやったかな？と考え直してみると、けっこうなことをやってきている。

１年生の時の各人レポート発表。スウェーデンや香港、中国、スイス、オーストラリア、チリとの比較文化。ODECO。夏休みの体験レポート。　など

「日本ではじゃがいもの芽をとるけどさ、主食に食べてるスウェーデンでは気にしないっていってたよ。」
当り前のように私が言うと、姉たちから必ず、おまえの友達はナニジンだ！という答えが返ってきた。

家でお腹が空いたときに、王さんから教えてもらった肉まんを作った。王さんほど生地がうまい具合にはいかなかったけど、おいしかった。

e-palsでチャットをしていたら、よくわからない言葉遣いがいっぱいでてきたりして困った。後でＰカンに聞いてみようかと思った。

「これはマナオだね～」タイに行ったとき知ったかぶって言った事前調査の知識が見事に当った。知識と現実が結びついた瞬間だった。

「これはどこの国の友達？」
父に手渡された手紙は、あのブータンからの青インキだった。

あまり外出もしないし、人付合いの悪い私の平坦な生活の一部に、いつの間にか入り込んでいた「異文化のスパイス」。
けっこう何にでも後込みしてしまう性格の私を、タイに連れていって、世界の調味料売場に足を留めさせて、いまなお、タイ仲間とタイ料理を食べに行き、シャンティーボランティア会に協力せしめる。
興味関心はつきることがない。
「異文化のスパイス」
これはいったい、何だったんだろう。
もう一度考えてみたい。

私は「異文化理解」という授業は（室岡先生の授業じゃないが）、文化を「比較」することに意味があったと思う。

それは歴史や地理にも言えることだと思うのだが、私たちが自分の生きている「しゃかい」を相対化して考えるためには、どうしても他の「しゃかい」が必要なのだ。

たとえばトイレの入り方。
「便座に座って用を達して紙で拭く」社会を当り前だと思っていたら、「紙で拭かずに手で拭く」社会や、「ドアなし向い合い」社会もあることがわかった。この時になって初めて、ではどうして私たちの社会には紙があるのか、ドアがあるのか、向い合わないのか、という自国の文化を問い直す機会を得る。この時にならないとわからない、とも言い得る。

わかりにくい現代の様子を知るために、より単純化されて考えやすい歴史を用いる。これは縦糸のしゃかいのみかた。

そして横糸のしゃかいのみかたはやっぱり地理。世界各国の実状と日本、など比べて自国の特徴を他国の特徴を学びとった。

そういった中で私は異文化理解を位置づけたい。より地域に根付いた文化を比較するこの授業はスパイス、模様のようなものだと考える。

できあがったり、一枚のしゃかい。

・・・・そう簡単ではない。もっと色々な要素が絡み合って生活しているわけだし。まあ、私の中のイメージだ。

異文化理解の授業は私の高校生活にとって欠かせないものであった。
いや、欠かしていたら知らないところで絶対につまらない思いをしたであろう、やっていてめちゃくちゃよかった授業であった。
異文化について考えた。それがそのまま自分に還ってきた。
何より楽しかった。

先生方にも異文化フレンズにも心から感謝している。

～おまけ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

しかし、とくに今年度の授業のあり方についてはもう少し考えたかった。
１年間学んできた生徒がたくさんいたわけだし、もっと積極的に自分たちで考えて授業内容を考えていくこともできたはずだ。（さとしほともたびたび話合った）

今日は何をするんだろ？、何の準備もなしに教室に向ってしまう自分には正直腹がたった。

全員で何をするのか話合っていたら、それだけで授業がなくなってしまうから、今週は誰、次は誰と誰というようにリーダーを決めて、その人達が先生や生徒と話合いながら、授業を作っていく。そのほうがもっと多様で面白く、やりがいのある授業であったのではないだろうか。

もしこれから、このような授業の機会があったら、ぜひそうしたい。

• まず1つに、自分たちの普段の"当たり前"というものが"当たり前じゃない"というのが普通なんだ、と気付かされました。
特に文化からくる生活習慣においては、文化はどこの国、どこの地域もみな違うのが当たり前。よく自分達の立場から相手を比べてみますが、その比べるという事がとても大切な事なのだと思います。
比べてみる事で相手を知り、また自分の国の当たり前だと思っていた事が実はそうでなかった！と気付いたりなど、視野が広がる第1歩なのだと思います。けれど、その"比べる"という事がエスカレートしないように気を付けなくてはならないと思います。「私の国の○○と△△国の○○は違う…」など、比べるばかりではお互いの距離は縮まりません。
お互いに近付こうとする気持ちを忘れてはならないと思います。
お互いに近付く気持ちがあってこそ、異文化をわかり合えるのではないでしょうか。むしろ、異文化理解とはそういうものなのかな…。

• 異文化で衝撃を受けたのがブータンとの交通。
自己紹介で、自分の大切なものや、自分が幸せを感じるもの、イライラするものに書いてある事が自分たちと違う！ 違うといっても、ブータンの子たちは本当に人間を大切にしている！という点が違うので、ものにあふれた生活の中での自分たちの♡はいかがなものかと考えさせられました。
自分でも自己紹介のには なるべくくだらない事（イライラする時など）は書かないようにしたのですが、いざ考えると何だろう？とすぐに出てこなかった。
とりあえず書いたけれど、ブータンの子たちのを読んで自分のものが少しはずかく思えてきました。物がたくさんあって、物は当たり前という生活の中の私達と、物はそれほどなく、物よりも人間が占めている部分が多い生活の中のブータンの人達とでは心うらも違ってきてしまう。人間を大切にする♡を忘れないようにしているつもりでもそれはあくまでつもりなのだと気付かされました。

• 今まで"異文化は異文化"というような1つの隔のように異文化のことを思っていたのかもしれません。けれど、日本以外のものにたくさん触れ、自分で何かを調べたりしていくうちに、その隔のようなものは感じられなくなった気がします。（実際はまだまだだろうと思うけれど）
ブルース・リーの映画に"Don't think, Feel!!"という言葉がありますが、これからはぜひそれを見習っていきたいと思います。
（あまり外国だとか異文化だとかを考えすぎずに、自然と物事を受け入れられるようになりたいです）

Ⅲ. 1年間ふり返って… (10)

時間数が少ない!!! しかも土曜だから前回やったこと、となると
もうそれから2週間たってしまっている…という状態でした。

小学校の先生に今、異文化理解やっているんです と言ったら
おどろかれました。高校生がそんな難しいことやってるの!?と。
たしかに「異文化」は難しかったです。知ることと、理解とは
違うのかい…?

異文化：生活様式や宗教などが異なる文化

理解：① 物事の道理をきちんと知ること。意味をのみこむ
こと。了解。
② 人の気持や立場がよくわかること。

知る：① 物事の内容を理解する。わきまえる。
② 見分ける。

と、広辞苑調べてみましたが…わからないですね、あまり。

1学期、面白かったです。他の国の料理や遊びをやったのを
覚えています。今もたまねぎのやつの味覚えてるんです。

2学期に入り、ハードになったと思いました。平行してやったり
したことがあったり…。

ブータンの子の手紙で異文化にふれたな!と思いました。
実際の目で見て、手で触る…本当に外国からきたと
思うとより一層「異文化らしさ」がますと思いました。
私たちと同年代の子でこんなに考えているんだ、えらい
と思うのもあります。

私は元々、異文化というのは意識していなかった気が
します。だから、見方がかわったとかはないと思います。

今回、色々と普通の授業でできないことをできてよかったです。
ハードでしたが。(レポートとか指が痛くなること…)

うまくまとめる言葉がでてきません…。

1年間おつかれさまでした。

(11)

～1年間の「異文化理解」の授業を通して～

この1年間、いろいろな国について、ものすごく深いところまで追求する事ができず、どれも中途半端終わってしまったけど、私はこれで良かったと思います。いろんな所に手を広げる事で、例え授業では、調べる時間がなくても、そのきっかけがあれば、その後、自分1人でも、それを追求していく事はできるし、そういう意味では、より多くの文化に少しでも触れる事ができて良かったです。

今回、私にとって、この「異文化理解」という言葉が、いろいろな意味を持つという事がわかりました。私の中での「異文化理解」とは、先生も、他のみんなにとっても、そうだったと思いますが、他の"国"というレベルで、今までは、考えてきました。例えば、日本では主に主食は、米だけど、イタリアでは、パンや、じゃがいもを主食にする、など、国と国との間の文化の違いだけを、「異文化」と呼んでいました。

しかし、今回、夏休みのレポートで、北岡さんが、障害者との体験について、レポートを書いているのを聞いて、「それは、異文化じゃないんじゃん?」と思いました。その時、木村先生が、「まさに"異文化理解"だね」と言ったのを聞いて、日本の中で、健常者と障害者の間に異文化があるという事など、考えた事もなかったし、ましてや、同じ"国"のレベルなのに、障害者の人の生活を異文化としてとらえるなんて、差別ではないのか、とものすごく、私にとって、その先生の一言は、衝激的でした。

その事に対して、ずっと疑問を感じながら、この1年間(半年?!)異文化理解の授業を通してわかった事……それは、「異文化」とは、"国と国"というレベルで考えるものなのではなく、"人と人"との間で考え、感じるものなのではないかと思います。

"国と国"との間で今まで異文化を考えてきたのは、やっぱり、住んでいる土地が違い、言語も宗教も違うのだから、文化が違うのもあたり前だし、このレベルで考える方が、新しい発見も多いし、明らかに、違うというのがわかるので、どうしても、このレベルでの事ばかりになってしまうのは、当然の事だったと思います。

でも、実は、異文化とは、国が違わなくても、人と人との間で、十分に、異なっているものなのです。例えば、岩手県に住んでいる人と、東京に住んでいる人。まず、言語の点でも、今回夏のレポートで橘さんが調べた方言というものがあり、それは、全く違う土地に住んでいる人には通じないと言っていました。もっと視野をせばめて、考えてみると、例えば、背の高い人と背の低い人。海の近くに住んでる人と、山に囲まれたところに住んでいる人。同じ国の中でも、異文化だらけなのです。

その中の1つに、障害者と健常者、という文化の違いがあるという事に気づきました。半年前、私がその先生の言葉に疑問を感じたのは、自分自身が、障害者の人を差別していたからなのではないかと思います。(保健の授業での影響大(笑))障害を持っている事を1つの背が高いだとか低いだとかそういうのと同じように、個性と考えれば、「まさに異文化」でした。この2年間の授業では、主に"国と国"とのレベルでの授業でしたが、私の中で変わった事は、「異文化とは、人と人とのレベルで生まれるもの」という事です。

私の中での異文化の視野が、距離という点でも、もちろん広がったし(ブルキナとか…)、種類・質という点でも、大きく広がった2年でした。この2つの点について考えながら、これからも、どんどん、「異文化の視野」を広げていきたいです。

Date . . No.

## 〈異文化レポート〉 ―感想― (12)

今年は去年とちがって時間数が極端に少なかったので、1つ1つの事に去年の様に集中することが出来なくて残念だった。逆に言うと(?)、時間が少ないのに余りにも多くのことをつめこみすぎていたと思った。どれもこれも中途半端におわってしまった。一体どうして前回まではこれをやっていたのに今回から全く違うことをやってるのか、と思った。最初の方にやったこととかあんまり覚えてないし…。もっと課題を少なくしてどれもこれもではなくみんなで何をしたいのかを決めてそれについて異文化理解を深めていきたかった。夏休みにみんなが調べたレポート発表ももっとたくさん聞きたかった。

ブータンの学生との手紙はすごく貴重な体験だったと思う。ただ多くの人が一通限りで終わってしまったのはちょっと…。紹介でおわってしまったのが残念。でも一通の手紙から異文化を感じた。親や勉強に対する気持ちが私たちとは全然違ってすごく驚いた。

クレア、アンディー、ロサリオの3人の留学生との交流は楽しかった。3人の国の料理や踊りを体験することができたし、話しも聞けて興味がもてた。やはり調べるだけじゃなく、実際に人に会ったり体感したりすると異文化にふれられていいし理解もできるんじゃないかなと思った。3人の存在は大きかった。

1年間(2年間)、授業を通して"異文化理解"という言葉について考えることがしばしばあった。「ああ…。こういう文化もあるのね。おりでいいんじゃん?」というのは理解ではなくただ単に受け入れているだけで、"理解"というのは受け入れの奥にあるんじゃないかと思った。「ありじゃん?」だけではなく、実際に自分で触れて、体験して、その上での感想、自分なりの考えを持った上で改めて受け入れるのが"理解"なのではないかと思った。まぁこれから今まで以上に異文化にふれる機会が増えていくと思うので、触れ合いの中で理解とは何かを考えて自分なりに答えが出していければいいと思った。

異文化理解という授業は他の学校にいたら絶対にないと思うし自分一人ではできない様なこと(留学生との料理作りetc…)ができる授業なので、すごくいいと思う。2年間とっていてよかった。授業スタイルが1年のころとは大きく変わってとまどったこともあったけれどそれなりに有意義な時間をすごすことができた。

13

[感想] + 異文化理解の感想

スモーキーマウンテンを少し調べたけれど初めて写真を見た時は本当に驚いた。ゴミの山でゴミを拾う少年…私よりももっと小さい子供が生きるため、家族のためにScavengerとして暮している。それも、それが昔の事ではなく今現在の事なのだ。相田さんもパンスタッフに昨年訪ずれたらしい。ものすごい臭いが帰ってもなかなかとれなかったそうだ。そんな中で暮らしていたScavenger達の顔にはそれでも笑顔があふれていたという。一日ゴミを拾えばもう一日生活できる…精一杯生きているのだ。スモーキーバレー周辺では障害児が他よりもよく生まれるらしい。健康面でも悪影響を及ぼしている。しかし、Scavenger達からその"仕事"を取り上げる事はできない。代わりの職業が無いからだ。

日本では不景気、不景気と騒いでもみんなすぐ色々捨てるし、飽食だしすごく恵まれてる。こんな日本が貧しい国、貧しい人々を助けないでどうする?! と言われているが、では何をすれば良いのだろうか? 政府が政府を援助してもスモーキーバレーにまで本当に援助の手はまわっていくのだろうか? 実際、フィリピンの本を見ると、高層ビルが建ち並ぶ街もフィリピンにはあるし、そういう所に吸収されてしまいそうだと思う。
私達個人個人で何もないんだろうか? 一つできる事はムダにすぐ捨てたりしない事なのかな? と思った。それが直接フィリピンの子供達に関係するわけじゃないけど気持ちの面で…でもそれってしょせんは自己満足なわけだからもっと直接的にどうやって助ける事ができるんだろう? わからない…それにわかっても自分がそれをやれるか? と言われてもわからない…ふう…。

明るい感想的にはフィリピンにたくさんの私が知らなかったフルーツがあってイイナー と思った事。全部食べてみたい——本場のバナナも味わってみたいなあと思った。本場のシェークも飲みたい。
フィリピンはスペイン、そしてアメリカと長い間他国の植民地として支配されてきた国でありそれゆえ文化もマゼマゼでおもしろいなと思った。スポーツで人気はバスケだったり食事スタイルが甘々で肉々しい(笑)だったりとアメリカの影響をうけてるし、宗教面ではスペイン統治当時のキリスト教





のカトリック教会がほとんどのフィリピン人が属する宗教である。
これからどんどんフィリピン独自の文化が育つと良いと思う。

異文化理解の講座は今年少なかった!!! 去年はもっと料理してた!(笑)
なんかこうしてせっかくフィリピンの事とか調べたりメール交換したならもっと初めからやりたかった。ちょっと中途半端に終わったし、相田さんにもやっと答えがいのある質問と言われるようになったし(笑)。
ブータンの子との文通は結局一通で、それで礼拝するとか家族をすごく大切にするとかはわかったけど、あまりよくわからなかった。これももし一年の初めにできていたら何通かはできていたと思う。
自分で異文化を体験してみたのはわざわざやらない事ができて良かったけど知識が無さすぎてみんなが知っているような異文化しか体験できなかった事が残念です。せっかくだからもっと異なる事を体験するべきだったかな?って。渡辺さんみたいに中国で実際にニーハオトイレを使用するとかってスゴイ! と思った。それこそ異文化体験!
自分もトイレで前に人がいる事を想像してみたけど、にできるだろうか?!

異文化のみんなとODECOができて良かった! 私はCAN-CAN(人のためになる事)ばかりであまり役に立てなかった(むしろ足をひっぱっていた)けれど何かを実際にやる事ができたことが嬉しかった。

メール交換をして全然知らなくて"バナナ"のイメージしかなかった国の事に少しでも詳しくなる事ができて最初めんどくさかったけど、興味をもてる事ができるともっと知りたくなるもんだなあ…と思いました。
貴重な時間を私のくだらない質問に答えるためにさいて下さって本当に感謝です。

あの研究発表会(2)の日の異文化理解は濃かった! 最後の方では、調べる時間をもらえたのは嬉しかったけどせっかくみんな集まっている時にみんなでできる事がしたかったと今では思う。最初の方で各国の遊び体験もおもしろかった。国がちがっても共通する遊びはいくつかあって、子供は考える事が一緒だ! と思った。

一年間、ありがとうございました。

⑭

物の見方なんてほんのちょっとずつ、ちょっとずつ変わるものだから、自分ではなかなか気付かない。でも改めて今と1年前と2年前の自分を比べてみると、ああそういえばと思いあたるところがいくつかある。

まず1つめは日本の文化に対する考え方だ。日本の文化、伝統なんて古くさくてダサイと思っていたが、今は違う。ベトナムのレポートに書いたように、なんだか"ステキ"に思えるようになった。何の変化もなくて単調でつまらないと思っていたのだが、だからこそ文化や伝統が面白いんだということに気づいた。

そもそも私が2年前異文化理解のクラスを選択したのは、別に日本文化を学ぶためではなかった。というよりも日本の文化につまらなさを感じていたから、外国の異なった文化を学ぶのに興味をもったのだった。そうして2年間、希望通りに外国の異文化を学んだ訳だが、結果的に今私は、外国の文化のおもしろさよりも、日本の文化のおもしろさの方を強く感じている。これはどうしてだろうか。

これには、この高校2年間で2回海外旅行を体験したこと、異文化のクラスで様々な国の文化に触れたこと、などをきっかけに私が日本という国を、ある程度客観視できるようになったからだと思う。初めてしっかりと外国と日本を比較してみて、違うことに気付いたからこそ、その違いを大切にしようと思うようになったのだろう。

これからも私は日本の文化や風習を大切にしていきたい。それにもっとちゃんと日本のことを勉強したいと思う。そして日本人としての誇りをいつも持っていたいと思う。

2つめは発展途上国に対する考え方だ。去年度の異文化ではいわゆる"発展途上国"であるアジアやアフリカの国々が取り上げられることはほとんどなかったように思う。だから私にとってそのような国々は、はるか遠くの地球の裏方にあるような存在であり、貧困だの飢餓だのと言われても全く実感のない、遠い別の星の話のように感じていた。また、「汚い」「危ない」といった固定観念も強く、去年Tばなさんがタイに行くと言い出した時は『なんでそんなところに行きたいのだろう…』と不思議に思ったものだ。（つづく）

しかし今、私にとって発展途上国は確実に近い存在になっている。元青年海外協力隊員の方のお話や、メール通信を通じていろいろな情報が入り、今までは社会の時間に習っただけだったことが、実際に起きている問題として考えられるようになった。この点でブータンとの手紙交換（もちろん今も続行中）は格別に大きな影響を与えたと私は思う。私の書いたものが、ブータンの学生の手に渡る、それだけのことじゃないかと言う人も多いだろうが、私にとっては重要だった。届くのには時間がかかる、もしかしたら途中でどこかにいっちゃうかも、向こうでは写真は貴重…とかそんなことを聞くたびに、またブータンの切手が封筒一面にはられているのを見るたびに、ああ途上国というのは遠い星に存在するんじゃないんだなあ、すぐそこにあるんだなあという実感を得ていた。そしてそんな実感を得る度に、自分は何をぼやぼやしてるんだろうと思ったりした。

ブータン人1人と知り合いになっただけなのに、今私は世界中の人の隣人になったような気がしている。大げさかもしれないがアフガニスタンの難民も、地雷に悩むカンボジアの住民も、フィリピンのストリートチルドレンも、何だか他人事ではないような気がしている。だから私は"自分にできること"が何かないのか深刻に考えている。

私達はこのクラスをとる前からいろんな異文化を知識としてすでに身につけていたと思う。でも頭の中の知識と実際の本物とは大きくかけ離れていることがしばしばある。その差は体験することによってしか埋まらない。いくら社会や国語で勉強してもそれは単なる文化の知識にしかならず、理解したとは言えない。2年間の異文化理解のクラスでいろいろなことを体験し、この差を埋めて知識を理解に変換することができた。できたのはほんの少しだけど、私は体験することの大切さを学んだと思う。授業は終わっても、これからも自分の足でいろいろなことを体験し続けていきたいと思う。

（終）

※チャリバ今年もやるよ～

あまべ先生布とっといてね☆

③ 1年間の「異文化理解」の授業を通して得たもの 考えたこと

この一年間の異文化の授業を通して様々なことを学びました。
まず理解するということが思いのほか難しいこと。やったことのとできたことの違うのと同じように、知ったと理解したはずいぶん違うということが夏のレポートを含めて、今までの授業の中でずいぶんわかったと思います。
次に、理解できない又はよくわからないという思いも理解のうちだということを知りました。日本のような一般的に言う恵まれた生活を当たり前のように(でいると、わかるけど実感がわかないことや、しばらく驚かされることはどこにもよく出会いました。
例えばブルネイの人々の生活は確かに大変だということが到着のみんなの発表でわかったけれど、彼ら自身知らないからこそ、大変とは思って暮らしていないような気も少ししました。
それから日本がどれだけ恵まれているのかがよくわかりました。実際、今の生活が当たり前と思って生きているし、これだけ様々な物が手に入るからこそ新たな欲も生まれてしまうけれど、このような生活を知らなかったらもっと何かが欲しいなんて思わないのではないかと思います。
そしてレポートを書くにあたって一番思ったのは、本やインターネットの情報をそのまま信じすぎるのは良くないということ。これはマダム(石出先生)が本当にいつもいつも言っていることで、これについてはずいぶん先生の授業で鍛えられたつもりだったけれど今回のレポートでまたまた感じてしまいました。ひとつひとつのことを知っていくうちに、祖田さんのメールと同じ点、似た点、全く違う点などいろんな所にあって、それが面白かったです。
最後に異文化理解といっても国、民族そして個人と見ていったら、異文化だらけで、国ごとにあるように見える文化でも個人によっても違うし、もちろん場所によっても違うということ。私フィリピンだったけれど、やはりミンダナオ島にいる祖田さんと、主都マニラの人々の生活や言葉も違うし、生活習慣は特に個人レベルの問題なんだと思いました。
一年間この授業を通して、レポートやプリントや大変なこともあったけれど実際にやったからこそわかることはすごく多かったと思うし、



実際にやってみることが多かったから意外とやったことを忘れないものなんだなあと思いました。
私は去年はいなかったけれど、今年はロクリオやクレアやアニタとゲームをしたり、ロクリオがいたからフィリピンにいる祖田さんとのメールの中で疑問に思ったこと知ったことも多かったです。
異文化理解をしてみて、日本のことさえ結構知らないことが多くて恥ずかしくなったので、これからは異文化にだけじゃなく日本のことを少しは知りたいと思いました。
世の中にはいろんな人がいるし、いろんな文化があるけれど日本の文化を伝えられる人になりたいし、自分の文化を誇りに思うなんてことが正直言って今までなかったけれど、そういう思いも、してみたくなりました。

⑯

# 3.「異文化理解」で学んだこと

一年前。自分の属していた特設講座が来年度は開講されない、と聞き、私は途方にくれた。配られたプリントに目を通し、周りの友人に尋ね回る。どうも異文化理解は、夏休みのレポートが大変らしい。でもそれ以外は料理を作ったりして楽しいらしい。そう、らしい、ということで、私はここにきてしまった。

そして、はじめての授業。メンバーを見て、私はすっかり腰が引けてしまった。みんな、私の中では真面目で知識欲旺盛な人、に分類される人たちばかりだったからだ。『ついていけるかなあ・・・』

実際授業が始まっていくと、私の予想は良い意味でも悪い意味でも結構あたっていた。

良かったことは話し合いになると、みんな真剣そのもので、いつも時間オーバーになるくらいしゃべる。他人の発言に関連して、自分の意見や類似体験などについて、積極的に発言していく。真剣なみんなの話を聞いていると、自分の知らなかったことや、気付かされることもたくさんあって、何かしら、私の成長の糧になったと思う。

そして悪かったこと、というか少し辛かったことは、やっぱりみんなすごすぎて、そのレベルに自分がついていくのが大変だった。何かを調べたり、レポートを書いたり・・・とにかくすごい。みんなのパワーに圧倒されっぱなしだった。

結局、最後まで圧倒されっぱなしだったけど、みんなには及ばないにしろ、少しは私も引っ張りあげてもらえたのではないかと思う。

始めのころの授業では、留学生に話を聞いて、彼女達の国の料理や遊びを体験した。比較的、生活水準などは日本と近い国々だから、あまり生活に差はないかと思いきや、一日に5回くらいおやつがあるとか、結構衝撃の事実もあった。そして、このころのことで一番印象に残っているのは、1人の留学生が、外国式挨拶（あの、両頬をくっつけて、キスしあう・・・）をお父さんに久しぶりにされたら、ちょっと驚いてしまった、と発言したことだ。日本では誰もする人はいないからだろうが、人間の環境適応能力のすごさというか、驚いた。

そして、徐々に発展途上国に目を向け始め、文化祭ではバザーまでやってしまった。こういう時の渡辺さんの企画・実行能力はすごい。私は、この準備にはほぼ参加していず、当日当番で行って驚いたものだったが、私が店番をしていると、見に来てくださった保護者の方に、すごいわね。などと声をかけられ、私なんかが褒められて良いのだろうか、ナベさんに聞かせてあげたい、と思う出来事がいくつかあったが、実際、展示も企画も素晴らしかったので、胸を張って笑顔でありがとうございます、と答えたのだった。そして、何も文化祭でやらなくても・・・準備とか間に合うのかな、と少し思っていた私だったが、やってよかった！とはっきりと思った。自分自身も、子供が1人でも助かるようにと願って、バザーの商品を買った。

ブータンの学生との文通は、結局一回だけになってしまったけど、彼らと私たちの価値観の大きな違いがはっきりとわかった。それは、必ずしもどっちがいい、といえるものではないと思うけれど、私に刺激を与えたことは確かである。自分より若い子でも、たいていがはっきりとした将来像を持っていることが一番印象深い。

そして、協力隊員の方とのメール交換、本などの資料では見えてこない部分をいろいろと知ることができ、それぞれの国がより身近に感じられるようになった。資料で、面積は～、首都は～で・・・と見ていても、フーン、という感じだが、隊員の方たちのメールは生の声。僕が～したら、みんなが～してくれた。とか、生活に即した体験談は同じ日本人から見たものの感じ方であるからか、時に自分もその場にいるような感じがするほどだった。今考えてみると、実際に今現在、その国にいる人とメール交換ができるなんて、どうしてどうして貴重な体験をさせてもらっていたんだ、と思い、多少遠慮をしていたことがもったいなくも感じられるが、隊員の方をはじめ、Meet The Globe の方、異文化の授業、すべてに感謝、感謝である。

この一年間、恐らくこの授業を取らなければ一生することがなかったであろう体験をいろいろして、今一番感じているのは、視野の広がりと、少々のことでは動じないようになったこと。そして世の中には自分が考え付きもしないような出来事や意見があるということ。このことは異文化、という大きなテーマだけでなく身近にも応用していけると思うし、もちろん、異文化のような大きなテーマにも対応していけると思う。なかなか日常では身につきにくい能力を1つ、得ることができたと思っている。そして、これから自分がやっていきたいと思うことは、いろいろなことに対して洞察を深め、根拠のはっきりとした自分の意見をもっていきたいということ。これがないと、自信を持って人とぶつかり合えないから。

—END—